

令和6年度
松山市議会議員海外都市行政視察

ドイツ（フライブルク）

フランス（エクス・レ・バン）

報告書

(2025.1.19~1.25)



令和7年3月

松山市議会

目 次

1 海外都市行政視察に当たって

(1) 目 的	1
(2) 視察派遣者名簿	1
(3) 期 間	2
(4) 訪問国及び訪問市	2
(5) 視察事項(調査研究テーマ)と分担表	3
(6) 視察行程表	4
(7) 会議等の開催	6
(8) 出発式	8

2 視察事項の報告(調査研究テーマ別)

(1) 交通施策	9
(2) 女性活躍	12
(3) 温泉と観光	15
(4) 教 育	17
(5) 海外都市交流	19
(6) 食と農	21
(7) スポーツ	23

3 所感

清水義郎	25
渡邊啓之	25
門田寛子	26
本田司	26
山本智紀	27
松波雄大	27
矢野尚良	28
本田精志	28
梶原時義	29
渡部克彦	29
大亀泰彦	30
土井田学	30

4 総括	31
------	----

団長 大亀泰彦

5 政策提言	38
--------	----

1 海外都市行政視察に当たって

(1) 目的

議員の海外への派遣は、諸外国の都市との友好親善並びに相互理解を深めるとともに、政治、経済、文化、都市事情その他必要な事項を視察調査し、国際性の涵養と資質の向上に努め、その成果を市政に反映させることを目的として実施する。

(2) 視察派遣者名簿

(令和6年12月定例会承認)

No	氏名	会派	備考
1	清水 義郎	まつやまチェンジアクション	
2	渡邊 啓之	まつやまチェンジアクション	
3	門田 寛子	新 風 会	
4	本田 司	フロンティアまつやま	
5	山本 智紀	みらい松山	
6	松波 雄大	ともに松山	
7	矢野 尚良	フロンティアまつやま	
8	本田 精志	松山一粒米の会	副団長
9	梶原 時義	新 風 会	
10	渡部 克彦	みらい松山	
11	大亀 泰彦	フロンティアまつやま	団 長
12	土井田 学	新 風 会	

派遣議員 12名

1	木村 美幸	議会事務局総務課長	随 行
---	-------	-----------	-----

随行職員 1名

(3) 期 間

令和7年1月19日(日)～1月25日(土) 7日間

(4) 訪問国及び訪問市

海外都市行政視察先については、姉妹都市であるフライブルク市を中心に行うこととし、本事業の目的及び事前勉強会において検討した視察事項(調査研究テーマ)に照らし、視察団の総意により決定した。

① ドイツ連邦共和国フライブルク市

ドイツ南西部の街で、人口約24万人の都市である。

1989年に姉妹都市提携調印から36年が経過するが、学生の派遣や俳句ポストの寄贈、環境分野でのWeb交流、記念事業実施による来松・訪問など様々な分野での交流により、深いつながりが保たれている。

② フランス共和国エクス・レ・バン市

フランス南東部のサヴォワ県に所在する人口約3万人の都市である。

ローマ時代に温泉地として栄え、現在も湯治を目的とした温浴施設があり、保養地として人気の観光都市である。また、秋山好古がフランス留学中に同市を訪問し、温泉を中心としたまちづくりに感銘を受け、本市の城と温泉を生かしたまちづくりにつながったのではないかとされている。



(5) 視察事項(調査研究テーマ)と分担表

視察事項(調査研究テーマ)は7テーマ、担当者については、団員12名を3班に分け、班別でテーマを分担することとした。

班	メンバー
A	渡邊啓之、本田司、矢野尚良、大亀泰彦
B	山本智紀、松波雄大、本田精志、渡部克彦
C	清水義郎、門田寛子、梶原時義、土井田学

No.	視察事項	視察先・内容	担当
1	交通施策	フライブルク ・持続的な都市計画 ・自転車施策、中央駅周辺トランジットの視察 ・エクス・レ・バン ・都市交通担当者との意見交換	A
2	女性活躍	フライブルク ・エクス・レ・バン ・現地在住者との意見交換	A
3	温泉と観光	エクス・レ・バン ・マリオズ温泉、シュバレ温泉視察及び関係者との意見交換	B
4	教育	エクス・レ・バン ・教育制度、不登校について意見交換	B
5	海外都市交流	フライブルク ・エクス・レ・バン ・市長主催レセプションへの参加と懇談	C
6	食と農	フライブルク ・オーガニック酪農農家の視察と意見交換 ・市給食担当者との意見交換	C
7	スポーツ	フライブルク ・SC フライブルクスタジアム、FTスポーツ幼稚園・小学校の視察と関係者との意見交換	C

(6) 視察行程表

No	月日(曜)	地 名	時刻	交通機関	日 程
1	1月19日 (日)	松山空港集合 松山空港発 羽田空港着 羽田空港発	15:40 17:35 19:00 21:55	航空機 航空機	集合後、団体待合室で出発式 空路、羽田空港へ 空路、ヘルシンキへ (所要時間 13 時間 5 分)
2	1月20日 (月)	ヘルシンキ着 ヘルシンキ発 チューリッヒ着 チューリッヒ発 フライブルク着 フライブルク	4:00 8:00 9:50 12:15 14:30 15:00 16:00 16:30 18:30	航空機 専用車 徒歩	空路、チューリッヒへ (所要時間 2 時間 50 分) 陸路、フライブルクへ 旧市街地視察 【表敬訪問】フライブルク市議会 【調査研究テーマ:交通施策】 フライブルクの交通施策についての講義、レンタル自転車 Frelo の貸し出し、中央駅周辺のトラ ンジットモールについて視察 【歓迎式典】フライブルク市役所 《フライブルク泊》
3	1月21日 (火)	Freiamt 村 フライブルク	9:00 14:00 15:30 18:30	専用車	【調査研究テーマ:食と農】 オーガニックによる酪農農家ビオホーフ ツア ミュレ(Biohof und zur Mühle)訪問 ソーラーパネルや熱の再利用、有機生産につい て視察 【調査研究テーマ:スポーツ】 SCフライブルク視察 【調査研究テーマ:スポーツ】 FTスポーツ幼稚園・小学校訪問 【意見交換会】 交通施策、学校給食、国際交流について 《フライブルク泊》

1 海外都市行政視察に当たって

No	月日(曜)	地名	時刻	交通機関	日程
4	1月22日 (水)	フライブルク発 ジュネーブ着 ジュネーブ発 エクス・レ・バン着 エクス・レ・バン	7:00 11:30 14:00 15:00 18:00 18:45	専用車	陸路、ジュネーブへ 【視察見学】車窓から国際機関視察 陸路、エクス・レ・バンへ 【歓迎式典】エクス・レ・バン市庁舎 【視察見学】エクス・レ・バン市で開催される 日本祭りの会場視察 《エクス・レ・バン泊》
5	1月23日 (木)	エクス・レ・バン	8:30 10:30 15:00	徒歩 専用車	【調査研究テーマ:温泉と観光】 マリオズ温泉視察 【調査研究テーマ:温泉と観光】 シュバレ温泉視察 【調査研究テーマ:教育と交通】 オートコンブ修道院の会議室にて教育・ 交通関係者との意見交換 《エクス・レ・バン泊》
6	1月24日 (金)	エクス・レ・バン発 ジュネーブ着 ジュネーブ発 アムステルダム着 アムステルダム発	7:00 8:30 11:50 13:35 14:25	専用車 航空機 航空機	陸路、ジュネーブ国際空港へ 空路、アムステルダム空港へ (所要時間 1 時間 45 分) 空路、成田空港へ (所要時間 13 時間 20 分)
7	1月25日 (土)	成田空港着 成田空港発 松山空港着	11:45 18:00 20:00	航空機	空路、松山へ 着後、解散

(7) 会議等の開催

◆ 第1回全体会議

日時・場所： 令和6年6月7日(金)・第1委員会室

- 案 件： ① 議長挨拶
② 自己紹介
③ 団長・副団長選任
④ 海外視察にかかる諸事項の周知
⑤ 団の運営

◆ 第2回全体会議

日時・場所： 令和6年6月21日(金)・第1委員会室

- 案 件： ① 視察内容等の概要の協議・決定
② スケジュールの協議・決定

◆ 第3回全体会議

日時・場所： 令和6年8月9日(金)・第1委員会室

- 案 件： ① 旅行業者提出の企画審査・決定

◆ 第4回全体会議

日時・場所： 令和6年10月1日(火)・第1委員会室

- 案 件： ① 旅程表の協議・決定
② 視察テーマ及び班編成の協議・決定
③ 勉強会の日程調整

◆ 班別会議

日 時： 令和6年11月6日(水)、7日(木)、8日(金)、11日(月)

場 所： 第1委員会室

- 案 件： ① 視察テーマ(班別)の協議・確認
② 事前勉強会の確認
③ 報告書の作成要領の協議・確認

◆ 勉強会

日時・場所： 令和6年11月25日(月)、28日(木)・第1委員会室

- 案 件 ： ① 都市間交流について
② 温泉を生かした観光施策について
③ スポーツ政策全般
④ 学校給食の現状と地産地消の推進について
⑤ 不登校対策・支援について
⑥ フランス国内事情について
(在リヨン領事事務所とのリモート会議)
⑦ 交通まちづくりについて
⑧ 秋山好古のフランス留学と大松山論について
⑨ 女性の活躍推進について
⑩ 少子化対策について
⑪ フライブルク現地事情について
(松山市現地協力員とのリモート会議)
⑫ 派遣承認について その他

◆ 第5回全体会議

日時・場所： 令和7年1月7日(火)・第1委員会室

- 案 件 ： ① 事前諸留意事項の確認
② 報告書作成を含む今後のスケジュールの確認

◆ 第6回全体会議

日時・場所： 令和7年3月6日(木)・第1委員会室

- 案 件 ： ①報告書の決定と議会報告の承認



全体会議の様子



勉強会の様子

(8) 出発式

日 時： 令和7年1月19日(日)

場 所： 松山空港 2階 団体待合室

出席者： 議 会:原議長、清水尚美副議長
議会事務局長、次長、事務局職員

次 第： ① 原議長あいさつ
② 大亀団長あいさつ
③ 団員紹介



大亀団長あいさつ



原議長あいさつ



正副議長と視察派遣者一同

2 視察事項の報告(調査研究テーマ別)

【1】交通施策

交通はまちのインフラ！

社会的位置づけと公費負担の明確化が必要

ドイツ、フランスは市民の移動の権利が保障され、交通が公共インフラとして定着していた。フライブルク市は、これまでの市議会行政視察においても、毎回、交通が必須のテーマとなっており、レギオカルテ(環境定期券)、パークアンドライド、トランジットモール、VGA(交通公社)等の具体的施策を学んできた。今回は、まずフライブルクイノベーションアカデミー(環境を中心にモビリティと都市計画、エネルギー、有機農業等の専門的なガイダンスをサポートする非営利法人)のハンスヨーク・シュバンター氏から「持続的な都市計画」をテーマにフライブルクの最近の交通に関する総括的な説明を受けた。まずはベースにあるのが2035年にカーボンニュートラル実現(日本は2050年)という野心的目標がある。その目標に向けて様々な政策分野の一つに交通政策がある。具体的取組み事例として

- ① ترام(低床の連結路面電車)の新設と拡張は40年間で運行距離は4倍、乗車人員は3倍近くになり、大学・研究機関や新たな住宅団地等、人口密度の高い地域に整備している。
- ② 駐車料金は中心部を高くし郊外地域を低く設定する。
- ③ 中心地に小売り商店や市場を大型スーパーは郊外へ誘導する。
- ④ 自転車政策(後述)

交通政策は気候保護政策の一環として総合的な施策として実施されるとともに交通事業は都市開発事業と組み合わせて総合的な施策として実施されているとの説明を受けた。その後、まちなかに飛び出し現地視察を行った。まちのシンボルミュンスター(大聖堂)、石畳の路面や水路等、街並みは中世の欧州を想起する中、近代的など派手な広告をつけた ترامが数分間隔で縦横無尽に行き交い、その前



ترامが行き交うフライブルク市内



中央駅の大型駐輪場

後を歩行者が横断し、自転車がかなりのスピードで走り抜ける。夕刻でにぎわいを感じつつも、車の騒音は無く静かで信号機や横断歩道等の路面標示もなく視覚的にも優しい。昨今では、自転車利用を促進するため、中心部の一部では、車道から自転車道（自転車道の総延長は400km超）へ、駐車場から駐輪場になり変わり、シェアサイクルの導入や中央駅には4,000台もの大型駐輪場も整備され、自転車通行数とそれによるCO2の削減値を明示するサインも設置され、ソフト・ハード両面から取り組みを強化しており、ここ30年間で自転車利用は15%から34%へモーダルスプリットが実現した。しかも交通にかかわる住民負担は極力抑える。スキームは行政が出資するフライブルク交通公社(VGA)が担い、交通は単体では赤字だが、水道・電力事業を担う公社の黒字分で補填し相殺している。

次に、フランスのエクス・レ・バン市では、地域交通は広域行政圏が担っており、同市を含むグラン・ラック都市共同体議会第3副議長フロリアン・メトル氏、同共同体交通担当課長ベンジャマン・ドロマル氏と意見交換した。事前学習にて、フランスでは1982年に世界ではじめて国民の移動する権利を定めた交通基本法が明文化された。加えてその実現を担保するために、国と地方(広域行政単位)に交通計画の策定が義務づけられ交通税(一定規模の事業所から徴収)が自主財源として確保されているとの情報を得ていた。フランスの交通事情は、自家用車の使用率は高く、物価高や土地の値段の高騰から、市内に若い人は居住することが困難なため、郊外に居住し都市部に通勤する傾向にあることから、自家用車比率は自然と高くなる。これはバブル期の本市含む地方都市と同様の傾向でもある。バス、電車等の公共交通や子どもの通学に関しては、どれだけ少ない人口のところであっても守られなければならない！との考えから、地域事情に応じてノンストップバスやミニバス等、完備されている。また、人口比率が少なくバスの乗車率が低い地域でも、経費の20%が旅客運賃、80%を企業(いわゆる交通税として)と利用者負担を低く抑えている。更

自転車利用と環境負荷の
相関関係を明示するメーター

に昨今、自家用車の利用が多い都市部では、渋滞対策としてライドシェア(自家用車の乗り合い)を進めている。アプリやGPS等、デジタル技術を活用し、現在、自治体が1km一人当たり(0.1ユーロ)の金額を負担している。2年前に導入し、利用台数は7,000台程度でまち中への自家用車の流入減少にも効果があり、継続をしていく予定だが、料金や行政負担については見直す可能性も示唆されていた。その他、運転士不足に関しては日本と同様な問題を抱えており課題共有ができた。道中、スイスジュネーブでもバスの運転士は年収1千万を超える高待遇ながら200名程度も不足しているとの通訳ガイドさんからの案内もあった。

日本においても2012年、フランスに倣い初めて交通政策基本法が策定された。しかし、論点となった交通権については財源論の合意形成(人口減少等で衰退する地方の隅々まで移動権を確保することの費用対効果)が不調に終わり、頻発する自然災害対策の交通基盤(ハード)整備に重きをおくものとなっている。ドイツでは環境、フランスでは人権をベースにライフラインの一つとして交通をとらえ住民負担の軽減に重きをおいていることが確認できた。伝統、文化、国民性等、同じ土俵で論じるのは無理があると思うが、コロナ禍、運転士不足、燃料高等で危機に瀕する公共交通(実際、事業をやめてしまうバス事業者も出てきている)に際し、国も地方も交通の位置づけや公費負担のあり方について今一度真剣に向き合う時期だと強く認識した。

【2】女性活躍

能力を高め、キャリアを評価し適材適所で女性活躍を支援する環境作りが急務

毎年、話題になる世界経済フォーラムが発表するジェンダーギャップ指数ランキング 2024によると日本は146か国中113位、先進7ヶ国の中では最下位となっている。一方、今回訪問したドイツは7位、フランスは22位と毎年高位にランク付けされており、女性活躍の先進国と評価されている。加えて、多民族国家で、人権尊重を国是として移民にも寛容である(しかしながら、昨今は移民対策に消極的姿勢の政治勢力が台頭しつつある)。日本は2030年までに意思決定ができるポジションに女性参画度30%を目標に掲げている。本市の現状は、市議会議員で26%、市職員で33%、管理職では10%程度となっている。国や本市議会でも、多様性や女性活躍が議論されるシーンが増えていることから、今回の視察テーマを女性活躍とし、現場で活躍する女性の生の声を聴くことで解決にむけたヒントを得たい。

ドイツ、フランスともにクォータ制(男女の登用比率50%にする制度)が導入されている。フライブルク市では、副市長4名のうち1名が女性、議員の半数が女性となっており、エクス・レ・バン市では、副市長10名のうち5名が女性、議員も半数が女性となっている。

今回、我々のフライブルク市訪問を実務的に取り仕切ったのは、女性の国際部長アニケ・ヴィーデマン氏だ。彼女は、今回の我々の視察の全行程に帯同いただいた。ホーン市長の間近で細かく情報やアドバイスを伝える姿や我々を含め全体を俯瞰し差配する仕事ぶりに、「異国の地で言葉の壁もあり上手くコミュニケーションがはかれるのか?」と我々の不安を払拭し、円滑な交流、調査・研究活動の推進力となった。このように有能な彼女にお話を聞く機会をいただいた。フライブルク市には、政治参画を支援する「女性センターEspace Femmes」が女性の政治参加のお手伝いをしている。残念ながら、今回の視察対象ではなく詳細は聞けなかった。アニケ氏が率いる国際部は全員が女性職員で、出産後全員が職場復帰し、家庭・子育てそして仕事を両立している。しかし、細かく聞いていくと、子ども中心の生活をのぞむ女性が多く、日本と同じように出世(責任の重い役職)より安定をのぞむ女性が多い傾向



フライブルク市国際部
アニケ・ヴィーデマン部長(手前)

にある。また、女性がいくら仕事を頑張って成果を出しても最上のポジションには就くことが困難な「見えない壁」が存在するとのことだった。ドイツと聞けば長きにわたって政権を担った強い女性首相メルケル氏をイメージする。性別に関係なく実力本位で組織のトップにつける環境が定着しているのではという期待観があったのだが、日本同様のアンコンシャスバイアス的(無意識な偏見)な意識も根強く残っていることも確認できた。

エクス・レ・バン市では、5名の女性副市長を配しており、その1人のイザベル・モロー・ジェアネ氏にお話を聞くことができた。彼女は、本業は絵画の修復師をしている。市内にはローマ時代に起源を有する史跡や遺跡が数多く点在している。これらを、原型を保存し後世に伝承することも行政の大切な役割であり、彼女はそのスキルを生かして文化・遺跡保存を担当している。他にもスポーツ担当には元女子スピードスキーの世界チャンピオンの方を配置している。このように、5人の女性副市長がそれぞれの持つスキルを生かしつつ市政業務を分担しており、2020年に導入したクォータ制も定着し、男女間の差異は全く感じないと言う。

異国の地でたくましく活躍する大和なでしこ(日本人女性)の存在も見過ごせない。ドイツ、フランスそして経由地のスイスのチューリッヒやジュネーブで通訳兼アテンドをしていただいた4名の方、全て日本人女性で、現地の方と結婚し、それぞれの地域で生き生きと仕事と家庭を両立されていた。今回、市長や行政関係者との間で専門的用語が飛び交う中、短時間で的確に通訳し、



エクス・レ・バン市との橋渡し役を担った
リヨン領事事務所の西川さん(右から三番目)

ことばの壁を越えて、お互いの意思疎通を円滑に進めていただいた。我々が意図する内容を補足説明も加えて先方にお伝えいただいた、恐らく事前学習等、しっかり準備されていたのだろう。また、帰途の際、航空機のトラブルに遭遇した時も添乗員と連携し冷静かつ的確に対応をしていただき、大事には至らなかった。また、在リヨン領事事務所職員の西川由里子氏は、学生時代にリヨン大学の留学が契機となり、現在、在留邦人のアテンドや緊張感のある外交事案の業務に従事している。今回の我々のエクス・レ・バン市への訪問に関しても、両市の縁結びの先導的役割を担っていただき、半年間におよび当局間との難しい交渉の窓口を担い、詳細な行程表を作成いただき円滑な視察履行を支えていただいた。グローバル化やデジタル化により距離や言葉のハードルは随分と低くなったとはいえ、現地の日本人の存在はやはり心強い。特に今回、主要な役割を女性に担っていただいた。改めて各位に敬意と感謝の意を表明する。



キャリアを生かし現場で活躍する女性たち

結びに、人口減少時代に突入し本市も四国最大の50万都市の看板を下ろさざるを得ない状況だ。特に、若い女性の県外流出は顕著化しており、その対策は喫緊の市政課題でもある。女性が個性や能力を磨き、結婚、出産、育児や家庭と仕事の両立をサポートし、キャリアに応じたポジションを確保できる環境作りを早急に実現するための官民連携した包括的な女性活躍の政策パッケージが求められている。

【3】 温泉と観光 医療ツーリズムで新たな顧客層の開拓へ

(1) エクス・レ・バン市の概要と取り組み

エクス・レ・バン市(Aix-les-Bains)はフランス東部サヴォワ県に位置する温泉地で、古代ローマ時代から湯治地として知られている。透明なブルジェ湖(Lac du Bourget)のほとりに広がるこの町は、温泉療法と観光が融合した独自の魅力を持ち、医療ツーリズムの中心地として国際的に注目されている。

(2) 事前調査：歴史と温泉の特徴

エクス・レ・バンの温泉は、豊富なミネラルを含む硫黄泉で、抗炎症作用や痛みの緩和、血液循環の促進に効果があるとされている。古代ローマ時代から治療目的で利用され、19世紀にはフランス国内外の上流階級が訪れる人気の保養地となった。ナポレオン3世の皇后ウジェニーをはじめ、多くの著名人が訪れた歴史もある。現在でも呼吸器疾患、リウマチ等慢性痛の緩和に効果があるとされ、医療分野での利用が進んでいる。

(3) 現地での視察：医療ツーリズムの取り組み

エクス・レ・バン市は、温泉を基盤にした医療ツーリズムの発展に積極的に取り組んでいる。

以下がその主な取り組みである。

① 温泉施設の近代化

「シュヴァラドン温泉」(Thermes Chevalley)をはじめとする施設の近代化が進められ、温泉浴や泥パック、ハイドロセラピー(水の癒やし効果を利用し心身の健康を促進する治療法)など多彩な治療プログラムを提供している。医師や専門スタッフが常駐し、個々の健康状態に応じたプランが提案される。

② 医療と温泉の連携

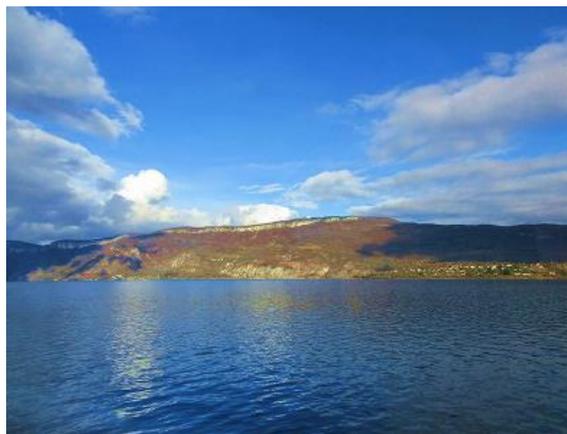
温泉療法と現代医療を組み合わせた治療が行われている。特にリウマチ、関節炎、慢性呼吸器疾患に対する治療が充実しており、理学療法士やリハビリ専門医の指導のもと、長期的な健康改善が期待されている。



ハイドロセラピー治療器具の説明を受ける

③ 観光資源との融合

温泉療法に加えて、ブルジェ湖周辺の自然や歴史的観光スポット、ウォータースポーツやハイキングなどが楽しめる環境を整備している。湖の風景を活かしたリラクゼーションプログラムは特に人気が高く、心身の健康促進と観光の両立を図っている。



風光明媚なブルジェ湖畔

④ 国際的なアクセスの向上

多言語対応のサービスや滞在プランのパッケージ化により、外国人観光客も利用しやすい環境が整っている。また、リヨンやジュネーブからの交通アクセスの良さも国際的な魅力を高めている。

⑤ 持続可能な取り組み

エクス・レ・バン市は、温泉資源の保護と地域社会の発展を両立させるため、環境保全プロジェクトを推進している。地元の食文化や伝統工芸を観光プログラムに取り入れることで、地域経済の活性化にも寄与している。

(4) 成果や課題 (結論)

エクス・レ・バン市は、温泉の伝統と現代医療技術を融合させた医療ツーリズムのモデル都市として、セレブ層を中心に国際的に注目されている。温泉施設の充実、医療との連携のみならず、都市周辺にはスキー場やゴルフ場などのスポーツ・運動に関する施設やのどかな湖などの地域資源を活かした船上レストラン、森林や切り立った山々の壮大な景観などの観光資源の活用、そして国際的な受け入れ体制の整備により、訪れる人々の健康促進と地域の発展を実現している。温泉地としての歴史を未来に向けて発展させるエクス・レ・バン市は、持続可能で魅力的な温泉地の好例といえる。また、2030年に予定されている第26回冬期五輪はフランスアルプス大会と称され当市を含むオーヴェルニュ＝ローヌ＝アルプ地域圏が開催場所となるため、更なる注目度の向上が見込まれている。

松山市が有する道後温泉は日本最古の歴史を活かしたプロモーションと現代アートに特化しているのが特徴だが、エクス・レ・バン市のような、現代医療技術を融合させた心身のリラクゼーションなどの医療ツーリズムの切り口は道後にはない長期滞在者などの新たな顧客層を掘り起こす可能性を有する課題になり得るのではないだろうか。

【4】教育

不登校を社会問題ととらえ、全ての子どもに安心を

1. テーマ選定 : 不登校問題とその対策比較

教育は子どもの未来を形作る重要な要素であり、各国の教育制度はその文化や社会背景に応じた特徴を持っている。本稿では、フランスと日本の教育制度の違いを概観し、不登校問題とその対策を比較する。

2. 事前調査 : 教育の目的とアプローチ

フランスの教育は「自由・平等・博愛」の理念に基づき、個人の自主性や批判的思考を重視している。授業では討論やディベートが行われ、生徒が意見を述べるのが奨励される。一方、日本は集団性や協調性を重視し、規律や忍耐力の育成に重点を置いている。授業は講義形式が多く、生徒が発言する機会は少ない傾向がある。評価方法も異なる。フランスではテスト以外にも口頭試験や課題提出が評価の対象となり、学力を総合的に判断するバカロレア（グローバル人材の育成）が重要視されている。一方、日本では定期テストや大学入試が重視され、知識偏重の評価方法が一般的である。この違いは生徒の学習態度や精神的負担に影響を与えている。

3. 現地での視察 : 教育制度の違い

(1) 学校文化は、大きく異なっていた。フランスでは授業外活動が少なく、日本のような部活動の文化は存在しない。一方、日本では部活動が教育の一環とされ、生徒は長時間学校に縛られる傾向がある。この文化の違いがストレス要因として働く場合もある。

(2) 不登校問題と対策について、日本では不登校が社会的課題として注目されている。不登校の主な原因には、いじめ、家庭環境、学校文化への適応困難などが挙げられる。対策として、以下が挙げられる。

① フリースクールやオルタナティブ教育

個別ペースで学習を進められる環境を提供する。

② スクールカウンセラーの配置

生徒や保護者への心理的支援を強化している。



個性に応じた教育プログラム
(FT スポーツクラブ)

③ オンライン教育の導入

自宅での学習を可能にする手段として普及している。

フランスでは不登校の原因に貧困、家族問題、学業不適應などが挙げられる。

対策としては以下がある。

i 教育福祉機関(CIO)との連携

生徒に適したカウンセリングや教育指導を提供する。

ii 家庭訪問プログラム

家庭環境を調査し、個別の支援策を講じる。

iii 学び直しのための特別クラス

再適應を目指した支援を行う。

4. 成果や課題：比較と考察

両国とも不登校問題に対し、個別支援やカウンセリングの強化を共通して行っている。日本ではフリースクールやオンライン教育等、学校以外でも教育の機会を確保することを重視するのに対し、フランスでは家庭訪問や特別クラスを通じて学校とのつながりを重視する傾向が見られる。ただし、福祉との連携が円滑で日本のように学校現場が加重負担とならないよう役割分担が明確化されていた。また発達障害児童生徒への対応について、日本では個性に応じた対応を行っているのに対して、フランスでは一緒のクラスで対応を行っているのが現状だった。不登校問題は教育の枠を超えた社会的課題であり、互いの取り組みを参考にしながら、すべての子どもが安心して学べる環境を構築することが求められる。



エクス・レ・バン市にて
教育制度、不登校についての意見交換

【5】 海外都市交流 今こそ、市民レベルの交流で平和を追求

今回、わが班の海外都市行政視察のテーマとして、1つ目は、コロナ禍で7年間、議員間交流が途絶えていた姉妹都市フライブルク市と旧交を確認すること、2つ目は、温泉・秋山好古・剣道等、松山と共通のコンテンツがあり、親日家の市長をはじめ役所幹部との交流や意見交換を通じ、エクス・レ・バン市と新たな海外都市間交流の可能性を模索することの2点を命題とした。

ご存じのとおり、今の世界情勢は、ロシアのウクライナ侵略戦争やイスラエルのパレスチナに対するジェノサイド的蛮行等、平和には程遠い現状にある。更に、ロシアのプーチン大統領や中国の習近平国家主席等、自国第一主義のリーダーが台頭する中、昨今米国ではトランプ政権が再登場したことを踏まえれば、ここ数年における世界の覇権争いを含め、また新たな軍事・経済戦争が勃発する懸念が増大しているのが現実と言わざるを得ない。そんな中、地政学的にヨーロッパ大陸は陸続きの地理的条件にあるがゆえ、両市を抱えるドイツとフランスは、繁栄と戦争の歴史を繰り返し、常にダモクレスの剣のごとく緊張感のある状況におかれている。

最初に訪問した姉妹都市であるドイツ・フライブルクの街は、環境首都と呼ばれるに相応しく、中心市街地から自動車にはご遠慮いただき、徒歩と市内電車(トラム)やバスと自転車が移動手段の80%を占める街の風景が目前に迫り、環境にやさしい街に見ほれた。マーティン・ホーン市長は、私たち訪問団への歓迎式典で、アメリカのトランプ大統領再選に触れ、自国第一主義者のリーダー台頭がもたらす世界平和への危機がかつてなく高まっていることに対して、フライブルク市が行っている松山市を含め世界9か国の都市との姉妹都市提携の重要性を強調し、今後ますます世界中との市民レベルでの都市間交流が大切になってくるとの御挨拶をいただいた。実際、同式典には我々と同じフライブルクの姉妹都市でありながら、不幸な争いが続いているテルアビブ(イスラエル)やリヴィウ(ウクライナ)の関係者も招いており、先日まで、市の幹部が被災者支援の協議のため、ウクライナを訪問していたことも伺った。ホーン市長の、世界に向けて環境先進都市を発信しつつ、その背景には平和を追求する確たる政治信条を垣間見る思いがし感動を覚えた。



旧市庁舎前にあるフライブルクとの友好の証

また、次に訪問したエクス・レ・バン市は、ローマ時代からの温泉保養地として知られ、フランス国内でも有数の観光地だ。坂の上の雲の秋山好古さんがフランス留学の際、日本人として初めて立ち寄り、その後の道後の繁栄に繋がったと言われている。その後、1998年のサッカーワールドカップフランス大会では、日本代表のキャンプ地になり、それを記念して作られた日本庭園もあり親近感を感じた。親日家で剣道の有段者であるルノー・ベレッティ市長が日本の都市との交流を望まれており、昨年末には、2022年に県人初の剣道日本一に輝いた松山市の村上哲彦氏を招きスポーツ交流を行う等、市民交流も始まっていた。更に、日本の伝統や文化を紹介する日本祭りが今回お世話いただいたリヨン領事事務所との共催で今年5月末に予定されており、ベレッティ市長から松山市も観光案内等何らかの形で参加してもらえないかとオファーもいただいた。先に示した松山市との共通点を生かし、新たな友好都市として学び、交流していく価値がありそうだが、まずは、議会として今回の訪問を機に、市民に広く知っていただき、草の根の交流を積み重ねて行くことが大切だと思った。

2人の市長に、ドイツもフランスもしかり、昨今の国際情勢において多様性を否定し自国第一主義的な政治勢力が台頭する風潮にあることに対する所見を問うたところ、両市長は異口同音に、「法の支配にもとづく同じ価値観を有するユーロ圏が一致団結し世界平和を実現維持することが肝要」との回答をいただいた。我々、地方議員の一番の任務は、市民の生命と財産を守る事である。つまり大局的見地から世界から戦争を無くすことでもあり、そのためにも姉妹都市のフライブルク市やサクラメント市との交流を深化することはもとより、新たに交流をはじめた平澤市や台北市、今後に期待が持てるエクス・レ・バン市との友好交流の発展に向けて尽力することが、世界平和の実現に寄与することになるとの確信を得た。



日本国旗で歓迎！エクス・レ・バン市庁舎前広場

【6】食と農

持続可能な食はオーガニック農業に有り

日本では米や野菜の高騰が社会問題となっている。また、自給率向上や残留農薬、遺伝子組み換え等、食の安全保障について政治の場でたびたび議論されている。今回の欧州視察の事前情報では、ドイツ、フランスは農業大国であり、食料は、ほぼ自国でまかなえる状況にある。また、フライブルクでは、2023年9月から公立の小学校と幼稚園全てでベジタリアンメニューの給食が提供され、更にオーガニック製品も20%から30%に引き上げられた。こうした事情から、環境先進都市フライブルクで、食と農に関する分野でどのように持続可能な政策が展開されているのかをテーマにすることとした。

今回の視察の舞台はフライブルクの中心部から南西20キロメートル、フライアムト村。フライブルクの非営利団体でイノベーションと持続可能な開発に関連するトピックに焦点をあてガイドツアーを企画催行しているイノベーションアカデミーのルチアーノ・イバラさんにご案内をいただいた。当地は、環境都市のさきがけとなり原発反対運動の中心となった黒い森地域の中腹に位置し、面積は5,292ヘクタール、その半分は森林に覆われ、人口は約4,200人。再エネに関してドイツでも先進的な場所であり、エネルギー自給率100%を実現した村として日本でも何度も紹介されている。市内から20分くらい車を走らせると、町なかとは別世界、なだらかな丘陵に牧草地や手入れが行き届いた山林が広がる風景が、深い霧が晴れるのと同時に我々の前にあらわれた。



ローゼさんの酪農農場の風景



酪農農場の説明をしてくれたローゼさん(左から二人目)

同地域で300年間4代にわたり専業で酪農を営んでいるローゼさんの農場を訪問した。農地は80ヘクタール、内訳は牧草地40ヘクタール、果樹や野菜30ヘクタール、林10ヘクタールで、親牛40頭、子牛30頭、完全有機で牧草のみを飼料とするグラスファットのミルクとチーズを生産し、繁忙期はアルバイトも雇うが原則ご夫婦と息子夫婦の4人で切り盛りしているとのこと。エネルギー

は太陽光や、森の木をチップにしたバイオマスで100%賄っていた。広大な牧草地とひたすらおいしそうに牧草を食べている牛たちの様子、人なつっこい番犬たち、ここでは時間がゆっくりと流れ何とも言えない幸福感を覚えた。

次に訪れたのは、やはり220年もの伝統的農家のシュリンゲンさんの牧場と水車小屋。半分からの有機での畜産業と小麦を栽培し水力での製粉業で生計を立てていた。あいにくシーズンオフで水車は駆動していなかったが、隣接する部屋で自家製のパンやベーコンを昼食としてふるまっていた。

学校給食に関しては、フライブルクでのスケジュールが朝から晩まで、公式行事や現地視察がぎっしりつまっていた関係上、副市長主催の意見交換会の場をお借りし、市教育局副部長イングリットさんと栄養士で給食担当のケアステインさんにご同席いただきお話を伺った。ベジタリアンメニューの給食は、自宅へ帰り昼食をとったり、パンを持参する子どもたちもあり、実際は半分からの利用だった。当初懸念されていた栄養面での問題もなく、保護者を含めおおむね好評であり、栄養士さんは人事異動も少なく、食育面でも子供たちに寄り添った指導環境が整っていた。

結びに、有機農業の全農土に占める割合はドイツ、フランスは10%程度に対して、日本は1%にも満たない状況である。また、ベジタリアンメニューの給食と完全一致ではないが動物由来を避けるヴィーガン給食の導入例は散見される程度である。今回の視察を通して、オールオーガニック(完全有機)とそうでない農家では、牛舎の香りが全く違うことに感動した。牛の動物的な体臭や糞のえぐい臭さが全くなく、植物的で干し草の香りそのもの、加えて温厚な牛たちの表情も印象に残った。ローゼさんいわく、オーガニック酪農について手間暇はかかるものの、持続的な地域社会を最優先に考えるならば、理にかなった農法である。何より最初15ヘクタールからここまで(80ヘクタール)農地を増やせたのも「有機やるんだったら、おまえにここをやるよ!」と提供いただいた地域の方々との人間関係が大切だと強調されていた。食と農!ここにも、持続可能社会を目指す、つまりベクトルを同じくする環境市民の意識の根付きを実感した。



酪農農場にて牛への餌やりを体験する

【7】 スポーツ

ハード・ソフト両面から、障壁をとりはらい生涯スポーツの実現を

フライブルクは、世界最高峰のドイツブンデスリーガ所属のプロサッカーチームSCフライブルクのホームタウンであり、同クラブの本拠地であるヨーロッパ・パーク・スタジアム(ドイツ名:オイローパ=パーク・シュタディオン)を視察した。ちょうどこの週末には世界でも三本の指に入ると評価されている強豪FCバイエルンミュンヘンを迎えての対戦を控えていることもあって、ピッチ上の天然芝の養生も入念に行われていた。特別に選手の入場待機場所やビジター選手(ミュンヘン側)の控え室にも案内していただき、大一番直前の戦場の緊張感を体験させてもらった。スタジアムガイドのシュミット氏の案内に加え、愛媛FCの国際戦略顧問として両クラブの橋渡し役も担っている大門学氏には通訳兼アテンドをしてもらった。

同スタジアムは前スタジアムがリーグ規定にあわなくなったため、2015年に議会承認や住民投票を経て建設の同意を得た。コロナ禍もあり工期は計画より長くかかったものの2021年に竣工した。総工費は、日本円で206億円、収容人数34,000人、運営会社の株式は100%市が保有している。15,000㎡の屋根に6,200枚の太陽光パネルが設置されており、年間2,600万kwhの電力でスタジアムの全電力を賄っており、アクセスはバスやトラムの公共交通機関と3,700の駐輪場を整備する等(実際の自転車利用は7,000台程度)環境都市フライブルクらしく環境負荷低減を強く意識したスタジアムであることも特徴であった。意見交換会で同席したバーク副市長もホームゲームは年間半分程度、自転車でスタジアムに駆けつけるとのこと、また彼いわく、同クラブに所属するサッカー日本代表の堂安選手について、プレーはも

とより日本から調理人を同行し日常の食生活からサッカーに集中する環境を整えようとするプロフェッショナルな姿勢を高く評価すると、同じ日本人として誇らしく感じた。ホームゲームのチケットは、ほぼ完売(愛媛FCの一試合の平均観客者数は4,700名程度)、チケット



EUROPA PARK スタジアム



SCフライブルクの説明をスタジアムガイドのシュミット氏(右端)から受ける

収入の他、スポンサーや広告、放映権収入やリーグからの補助金等で開場以来、黒字経営とのことだった。特にスポンサーとして地元企業を大切に、特別観覧席等数々の特典が用意されている。またジュニアからトップチームまでの一環した育成システムが構築されており、地域の子どもたちや障がい者、スポーツクラブ支援も日常的に行われている。地元密着のクラブであり、ドイツ国内でも最もモダンな「模範的クラブ」として高い評価を得ているとのことだった。24万人の人口で3万4千人のスタンドが常に満席になる、一方、50万都市でありながら5千人に満たない現状をいま一度、考えさせられる絶好の機会となった。

次に訪れたのは、総合型スポーツクラブ FT(フライブルク・ターナーシャフトフォン)1844です。代表取締役のフィッシャー氏からお話を伺った。敷地内には、体育館、プール、フィットネスルーム、球技場、ローラスポーツ場、武道場等のスポーツ施設を有し、レクリエーションスポーツや競技スポーツなどの市民ニーズに応えるとともに加えて、国の認可を受けたスポーツに特化した幼稚園や小学校も設置している。クラブ設立は1844年、体操クラブから発足し、現在の会員は約7,000人そのうち子どもが半分、125名の常勤職員、400名のトレーナーや指導員、150名のボランティアが支えていた。多数ある施設の中で、スポーツ幼稚園を視察した。あいにく夕刻時で直接子どもたちとは触れあうことができなかったが、子どもたちの趣向を凝らした工作物が部屋いっぱい飾られていた。同クラブは、1970年代に敷地内でスポーツを通して子供たちに教育的ケアを提供し始めた。それ以来、施設の種類も質も着実に増し、現在は2つの幼稚園、1つの統合幼稚園(障がい児対応)、1つの託児所の計4施設から構成されていた。



スポーツ幼稚園での視察

基本方針は、子供が自立した社会的に能力のある人格に発達することを目的としており、多くの場所と時間をスポーツに提供することで、最適で全体的な人格発達の基礎を形成し、幼児期のポジティブな運動体験は、スポーツとの関係を生涯にわたって築くのに役立つとのことだった。

日本では、スポーツは、子ども、学生、社会人そして生涯スポーツ、さらにはプロスポーツとそれぞれ環境が異なる壁があり、その壁を取り払おうと総合型地域スポーツクラブを推進しているものと理解している。しかし、その取り組みは限定的であり、加えて昨今、部活の地域移行も行政課題の一つとなっており、今回の視察はこうした課題対応への一助となるのではと強く感じた。

3 所感

多くの成果を今後に生かす

清水 義 郎



エクス・レ・バン市での歓迎式典において
当市の保育士さんと

今回、市議会議員として初めて海外行政視察に参加させていただきました。

事前にドイツ、フランス、また本市での各種施策についての勉強会等を複数回行い、その中で視察におけるテーマを設定し、それぞれのテーマごとにグループを作り分担してテーマに関する視察、調査を行う体制を作り上げるなど、大亀団長をはじめとした視察団の視察に対する意欲を強く感じる視察となった。

ドイツのフライブルク市においては、車道を廃止してトラム(市内電車)の軌道にするという大胆な交通政策、給食のオーガニック化を大幅に進めるなど、市長のリーダーシップと市職員の熱意が施策を大きく前進させ、市民からも大きな支持を得ていると感じた。

フランスのエクス・レ・バン市は今回の視察が初訪問だったが、本市と同じ温泉が有名な保養地であり、秋山好古がエクス・レ・バンを始めて訪れた日本人であるとされているなど共通点も多く、今後の相互交流が深まることに大きな期待を感じる訪問であった。

この報告書には書ききれないほどの多くの成果を今後の議員活動に大いに役立てていきたいと思う。

働く女性が「楽しい」と思えるの職場環境を

渡 邊 啓 之

今回の海外視察に関して、議員でしか行けない所や現地に行かないと聞けないものがたくさんある事に気づき、その見たもの聞いたものが少しでも松山市に活かせるものがあるのではないかと思います今回の海外視察に参加することとした。

事前にヨーロッパの人権課題や問題を調べてから視察に行ったが、現地で見聞きしたものは資料などで学ぶより、現地で活躍している働く女性たちの声を聞き共感できること、これから本市としての課題として取り組んでいかなければいけないこと、そして改めて本市の良さなどを感じた学び多き視察であった。

その中でもやはり一番感銘を受けたのは、現地で話を聞かせていただいた働く女性たちからの「仕事が楽しい」という言葉だ。その言葉を聞き、松山市の働く女性にも少しでもそう思える職場環境になるよう、議員としてお手伝いをしていきたいと改めて思わせてもらった。市政も民間企業に対して連携を行う事によって、男女による仕事内容の違いや賃金格差、女性に対してのアンコンシャスバイアスにとらわれることなく、働きがいがあり着実に働く人達の声が届く企業になるための企業体制や若者の就職に対する諦め感がないようにしていける職場環境作りを市政と民間企業が行なっていかなければならないと思う。

変わらぬ街並み

門田 寛子

今回の行程では、ドイツとフランスの2カ国の都市を訪れることができた。個人的に、20年以上前にヨーロッパに来たことがある。

今回は、ドイツゴシック建築の傑作といわれるフライブルク大聖堂まで電車通りを歩いた。何両編成もの電車が行き交うなか、歩行者も上手に行き来し、電車道も自由に横断…クラクションも鳴らされないし、ゴミなども落ちていない。電車、歩道、自転車道が確保されており、自転車専用道路と示された幅広い道路、途中、レンタルバイク貸出場を何度か見かけ、ハンドル前に、子供を乗せる大きな荷台のあるバイクもあった。スマホで予約し借りることができ、電車のチケットも10種類以上用意され、レンタルバイク付き等、用途に合わせてられるようだ。

ドイツ、フランスともに自動販売機などは道路になく、カフェやレストランでの食事が大切にされていたり、規制や法律もあり、手軽に購入するという文化があまりないそうだ。

市の中心部に私用車でアクセスすることはできず、市民、観光客ともに公共交通機関を利用する機会が多いのだが、自転車通勤に変えた人を対象調査で、風や日差し、時には雨を直接体感する機会が多くなり、3割近い方が「環境を意識するようになった。」と回答しているそうだ。このように、自然環境の重要性を理解していき、変わり続けたからこそ、変わらぬ街並みがあるのだと感じた。



栄養士給食担当の若手ケアステインさん：左手
と教育局副部長のイングリットさん：中央

多くの学びと貴重な経験

本田 司

今回、とにかく寒い日々だったが、様々な所を視察し、「交流の大切さ」を肌で感じた。海外の都市交流を図り、今後の松山市政に反映していかなければと思っている。フライブルク市とは36年の姉妹都市であり、ホーン市長はじめ関係者の皆さんには温かい歓迎を受け、感謝申し上げたい。その中で印象に残ったのは、SCフライブルクで34,000人のお客さんが収容できるなど、クラブの運営、公的機関や企業との連携についてレクチャーを受け、今の経営につながっていることに感銘を受けた。

エクス・レ・バン市においては、人口3万人だが、ローマ時代からの温泉地と知られ、ゴルフ・カジノ・クルージングなどの市民が楽しめる娯楽が満載され、リウマチや呼吸系疾患の温泉治療を行なっている都市として「健康都市」に指定されているとのことだった。温泉治療機器など様々な物を視察でき本当に参考となった。今回、初めての海外視察だったが、学ぶことがたくさんあり、貴重な経験となった。

持続可能な地域づくりに市民の理解と協力が不可欠

山本 智紀

今回の行政視察では、ドイツのフライブルク市とフランスのエクス・レ・バン市を訪れ、それぞれの都市が取り組む環境政策や都市計画を学ぶ貴重な機会となった。

フライブルク市では、持続可能な都市づくりの先進事例として、公共交通の充実や再生可能エネルギーの活用が印象的だった。特にトラムの利用促進による交通渋滞の軽減や市民が積極的に環境保護に関与する姿勢が見られた点が印象的だった。

一方、道後温泉のルーツを感じたエクス・レ・バン市では、観光と環境保護の両立に注力しており温泉地としての資源を生かしながら、地域経済の発展を目指す施策、また観光業の振興と環境負荷の低減を同時に進める姿勢は、観光地を多く抱える日本の自治体にとっても参考になると感じた。両市の取り組みから持続可能な地域づくりには市民の理解と協力が不可欠であることを再認識した。この視察の学びを、今後の政策立案に活かしたい。

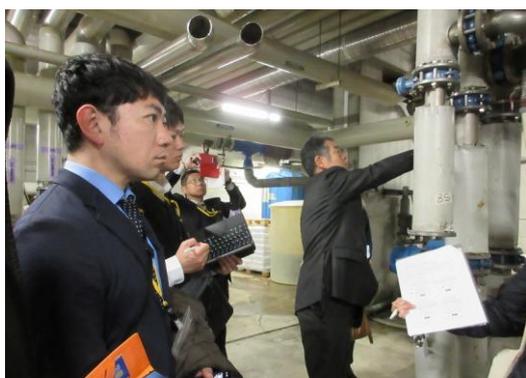


エクス・レ・バン市にて国際交流

地域資源を把握した戦略が大切

松波 雄大

1. フライブルク視察：ドイツ・フライブルクでは、スポーツ振興や持続可能な農業に関する先進的な取組を視察した。まず、SCフライブルクのサッカースタジアムを訪れ、環境に配慮した設計や運営方法について学んだ。再生可能エネルギーの活用や自転車利用が進んでおり、環境負荷の低減が図られていた。次に、持続可能な農業の現場を訪れ、地域の農家と消費者を結ぶ仕組みやオーガニック農業の推進策について意見交換を行った。



エクス・レ・バン市の温泉施設で説明を受ける

2. エクス・レ・バン視察：フランス・エクス・レ・バンでは、温泉観光を活用した地域活性化の取組を視察した。温泉施設では、医療・健康増進を目的としたプログラムが提供され、長期滞在型の観光促進策が進められていた。また、カジノや劇場との連携による観光誘客についても学び、娯楽・文化施設との相乗効果が地域経済に寄与している点が印象的だった。

3. 視察の成果と今後の活用：今回の視察を通じ、海外における環境配慮や持続可能な事業の取組、また地域資源をしっかりと把握した観光戦略の重要性を実感した。個人的には海外の方々と通訳なしでのコミュニケーションをどこまでできるかは、非常に重要な個人の能力として必要なものと感じ、子どもたちにも海外交流や英語力向上を感じられる取り組みが必要だと感じた。今回の視察で得た知見を活かし、本市においてもスポーツ振興や観光政策のさらなる発展に向けた施策を検討していきたい。

笑顔あふれる交流で学びを生かす

矢野 尚 良

松山市とフライブルク市との姉妹都市締結から、コロナ禍も経験をし、今回8年ぶりの市議会議員団の視察となった。フライブルク市の中心部は石畳の路面であり、市内中心部には、自家用車を含む自動車の流入を大きく制限をし、本当に目を引くトラム(路面電車)がひっきりなしに行き来をする歩いて暮らせる街の典型のような造りとなっていた。そのトラムのそばを人が往来をし、安心安全なまちづくりを行政が実施していることが、明確に伝わってくるものであった。さらには自転車の交通にも力をいれており、専用レーンをネットワーク化し、環境CO2削減目標をデジタルに確認することができるよう工夫をされていた。

さらには、SCフライブルクのスポーツエンタメとしての考え方や、街をあげての支援等を考えたときに愛媛FCに対する本市を含めた支援等の脆弱さをしみじみと感じ、街に愛され、おらが町のサッカーチームとしての確立には資金、施設整備、強さ、など様々各面での必要性



ホーン市長(中央)と笑顔で交流

をみせつけられた気がした。フライブルク市の環境に配慮した交通施策や、観光、雇用、スポーツなど知れば知るほど、本市が取り入れ、学ぶ必要がある点を感じさせられた。

フライブルク市より今度は、本市に視察団が来松する予定とのことであるが、様々なもてなし方法で、笑顔溢れる交流を今後も継続する必要があることをしみじみと感じさせられた。

交通まちづくりの進化を感じ、新たな交流に期待

本 田 精 志

今回の海外都市行政視察に参加して、国際交流の意義や重要性を肌で感じることをできたことが私にとって大きな成果となった。

特によかったのは、フライブルク市の交通施策だ。車の利用を削減し2035年には排気ガスを0にする目標で取り組んでいるそうで、自動車大国のドイツにおいて素晴らしい取り組みだと思った。トラムが縦横に走ることで市民の移動手段となり、歩きや自転車、バス等で移動する環境に配慮し健康にもなれる、市民の80%が公共交通等を利用しているとの説明に大変驚いた。10年前にも視察で訪れたが、その時より進んでいた。また、FTスポーツ幼稚園の取り組みは良かった。

ドイツのフライブルク市もフランスのクスレ・バン市も市長はじめ式典出席者から歓迎を受け有意義な交流ができた。中でもクスレ・バン市のベレッティ市長は2日間の視察すべてに出席し、交友関係を築きたい気持ちに感謝と感激をしている。温泉が共通のクスレ・バン市がフライブルク市同様に交流できることに大きな期待をしている。

視察先まで帯同いただいた
ベレッティ市長(左から三人目)

平和に向けて、まず私たちが行動を

梶原時義

本市との姉妹都市フライブルクと温泉観光都市エクス・レ・バン

訪問にあたり、私の興味はヨーロッパとりわけドイツの市民が、かつてユダヤ人を迫害した歴史がある中、現在のイスラエルのパレスチナ人に対するジェノサイド行為をどのように捉えているのだろうか、ということだった。

希望したアウシュビッツには行けなかったが、ヨーロッパの持つ地理的条件が、欧州各国の繁栄と戦争と紙一重の緊張状態の中、多くの移民を受け入れ、様々な人種の人々と平和に暮らすための生き方を実践しているという答えを確信するに至った。

世界は、トランプ大統領をはじめ自国第一主義のリーダーが台頭し、核や武力を背景に覇権や経済戦争、あるいは世界戦争へとエスカレートさせる事の無いように、私たちができる行動として、世界の都市の間で平和友好交流を活発にしていくことが大切ではないか。

フライブルクの環境政策と人にやさしい公共交通政策に学び、子供たちの将来のために発想の転換をしなければならないと思い知らされた意義ある視察内容を本市の政策に生かしていきたい。

お互いを理解すれば、銃口を向けることはできない

渡部克彦

今回の海外都市行政視察ではフランス在リヨン領事事務所の尾形所長の言葉が一番印象に残っている。ドイツ2日、フランス2日の視察最終日の最後の挨拶で、「皆さん、どうぞ国際交流をすすめてください。国も頑張りますが限りがある。民間レベルや市町レベルの交流が今後大きな力になります。お互いの国を、地域を理解して交流を進めればロシア、ウクライナのような事には発展しないはずであると。」お互いの相手を理解すれば銃口を向ける事はできない、国際平和に貢献するのだと！フランス視察の2日間ずっと同行をしていただいた尾形所長をはじめ在リヨン領事事務所の職員の方には感謝しかありません。

フランスの視察について、はじめて訪問するエクス・レ・バンではベレッティ市長の熱烈的な歓迎が嬉しかった。剣道の有段者で親日家の市長公務の合間をぬって私たち訪問団と合流してくれ心からもてなしてくれているのを肌で感じる事ができた。

ベレッティ市長、来日の際には是非、松山に立ち寄っていただきたい。交流を深めたいと思っている。



国際交流でお互いを理解

議会が主導し、新たな交流に期待

大 亀 泰 彦

私の所感は2点。まずはフライブルクの交通まちづくり。以前、訪問した時(2018年)に比べ路面電車は大幅に延伸し自転車政策が充実し、2035年カーボンニュートラル実現に向けバージョンアップされていた。まち中は、若い人達があふれ活気に満ちていた。賑わいを感じつつも雑踏感は無く静寂、雑音や臭いを感じない無色透明感で居心地が良い、その解は自動車が走っていないこと。エンジン音や排気ガス臭、クラクションの音は無い。このようなまちをお手本とし、松山市が目指すのは「歩いて暮らせるまちづくり」、来秋、四国初のトランジットモールとして、市駅前広場が完成する。その方向性に間違いのない事を実感した。

2点目は議会外交。フライブルク市とは姉妹都市提携36年、新しいホーン市長他行政関係者との良好な関係醸成に寄与できたと思う。また、今回、議会が主導し初の公式訪問となったエクス・レ・バン市、ベレッティ市長他、全庁あげての大歓迎や美しい自然や温泉、秋山好古さんとの縁や親日ぶりに、将来的な交流に期待が持てた。



ベレッティ市長と剣道談議に盛り上がる

140年の時を経て、必然的な運命に感動

土井田 学

独(フライブルク市)、仏(エクス・レ・バン市)の視察を終えて。

強行日程であったが、非常に有意義かつ、印象に残る視察であった。

先ず、両市の市長が、終始一貫し、遠来の客に対する温かいおもてなしの心を持ち、接していただいたことに感謝申し上げたい。

フライブルク市は人口増を続けている。その要因を市長に尋ねると「魅力」という言葉をいただいた。人が集い定住する魅力とは…。肝に銘じておく。

初訪問のエクス・レ・バン市は、予想以上の感動と感激を与えてくれた。今の松山発展の基がこの地から生まれたと言っても過言ではない…。との感を抱いた。

フランス留学中の好古が、久松定謨公に同行し、同市を訪れ、松山の隆盛策を悟り、温泉・港・海水浴場等々を、大松山論に著した。今もその優雅な姿を残す、定謨公が建設された萬翠荘は、同市の美術館「Faure」のイメージが生かされているとのこと。その現地を視察最終日の夜に、在リヨン領事事務所の都築氏にご案内いただいたことは必然の気がしてならない。感謝！



リヨン領事事務所の尾形所長(左手)と都築副領事(右手)

4 総括

団長 大亀 泰彦

入念な準備と明確な目的意識、決意を胸に

令和6年6月7日、令和6年度松山市議会議員海外都市行政視察に関し参加希望議員が集まり視察団を結成、団長に私大亀泰彦、副団長に本田精志議員が選ばれた。視察団には正式名称とは別に、団体の呼称を「チーム・あらかると」とした。今回、会派横断的なメンバー構成になったことにちなみ、フランス語で一品料理、個性を大切にするという思いを込めた呼称だ。

視察先は、姉妹都市であるドイツ連邦共和国フライブルク市、温泉と秋山好古にゆかりのあるフランス共和国エクス・レ・バン市とし、調査研究テーマを「交通、女性活躍、温泉観光、教育、海外都市交流、食と農、スポーツ」の7つに決定した。また、昨今、海外視察にかかわる報道や当該事業の是非が論じられる事情に照らして、①費用対効果を考慮し経費節減に努めること②当該事業の効果、説明責任の明確化や検証を含め、市政及び議会改革への提言を報告書に盛り込むことの2点を留意事項として進めることを団員間で共有した。

その後、市内旅行代理店業者6社に企画書の作成を依頼し、その中の、(株)フジトラベルサービス様に決定した。事前準備として、全体会議5回、班別会議3回、事前勉強会2回、その他事務局及び業者との会議やリモートでの現地との打ち合わせ等、安全かつ円滑な視察を実現するため、計画的かつ詳細に準備を進めた。とりわけ、議会のデジタル化により、初めて実施した現地担当者とのリモートでの勉強会は、現地の気候や治安状況等、実情をリアルに知るうえで大変有効な手段だった。

令和7年1月19日(日)午後4時、松山空港にて、派遣議員12名、随行職員及び添乗員の合計14名、原俊司議長、清水尚美副議長にご出席をいただき出発式を執り行なった。冒頭に、原議長から、「寒い時期での長旅となるが、体調に留意し所期の目的遂行に努めて欲しい」との激励をいただき、私から、まずは視察派遣に対する謝意を述べた後、市政発展に寄与することを期し議会外交と先進的知見の収集に全力を尽くすとの強い決意で応じた。

午後5時35分松山空港を発ち羽田空港にて出国審査を済まし、羽田空港からフィンランドヘルシンキ・ヴァンター国際空港に到着してユーロ圏への入国手続きを済ませ更に空路にてスイスチューリッヒ空港へと降り立った。その後、陸路にてフライブルクを目指した。

車窓からの風景はどんよりとした曇り空、霧がかかり、視界不良、わずかに見える地面は

草木一面に霜が降りたように凍結し、松山では見られない風景の中、バスは歩みを進めた。フライブルクに入る少し前には、霧も晴れ、陽が差し青空も現れるほど天候は回復し、我々の到着を歓迎しているように感じた。現地時間は20日午後3時過ぎ(日本との時差は8時間)、松山をたって延べ約30時間が経過していた。

日々、成長する持続可能な環境首都(グリーンシティ)フライブルク



フライブルク市の大聖堂

ホテルにて、松山市現地協力員の大門学氏、半世紀以上に渡ってフライブルク市に在住し、姉妹都市提携時から両市の橋渡し役としてご尽力いただいている独日協会フライブルク松山会前田成子会長にお出迎えをいただいた。80歳を過ぎてもお元気な前田さんに促され、旅装を解く隙もなく、早速、中心市街地を徒歩での視察へと背中を押された。私自身フライブルクは8年ぶり3度目の訪問となる。

中世の欧州を彷彿させる街のたたずまいや石畳の路面、風情あふれる中、近代風の色とりどりの広告をつけたトラム(低床の連結路面電車)が縦横無尽に行き交い、その前後を歩行者が横断する風景は環境首都フライブルクならではの、また帰って来たんだという

望郷の思いも感じた。更に、以前にはあまり見かけなかった自転車が頻繁に行き交う光景は、日々、街が成長している証左でもあり、街の活力を感じた。

1時間程度前田さんのまちのガイダンスや両市交流の昔話を伺いながら散策した後、フライブルク市庁舎を訪問した。おなじみの庁舎前の石畳に刻印された松山市の市章を確認した後、建物内に導かれた。早速、マーティン・ホーン市長の出迎えを受け、会議室に招待された。当日は、財政に関する委員会が開催される直前でもあり、多くの議員各位も出席されていた。これから議論が始まる真剣勝負の前とあって、緊張感が感じられた。我々12名の議員の来訪をホーン市長自らが紹介され、視察団一同が背筋を伸ばして一礼をする姿に、大きな拍手と優しい笑顔で迎えていただいた。その様子



トラムが行き交うフライブルク市内

は翌日の地元紙にも大きく報じられた。

その後、早速、役所の会議室をお借りして、調査研究テーマの交通「持続可能な都市計画」について、フライブルクイノベーションアカデミーの担当者から総括的な説明を受け、その後、徒歩で街なかの自転車道や中央駅周辺の4,000台収容の大型駐輪場を視察し、トラムに乗って再び市庁舎に帰り歓迎レセプションにのぞんだ。午後6時からホーン市長をはじめ4名の副市長や市議会議員、独日協会の皆さん、我々と同じフライブルクの姉妹都市の方、50名くらいの方にご出席をいただき、歓迎レセプションが始まった。冒頭、地元子どもたちの演奏で出迎えていただき、その後、ホーン市長から歓迎の御挨拶をいただき、私から改めて大歓迎のお礼、これまでの環境や教育、交通面でのフライブルクの先進事例を参考に



ホーン市長から記念品を贈呈いただく

した本市の取組みが順調に進んでいることを報告した。その後、個々にプレゼント交換や写真撮影、言葉や距離の壁を乗り越えて懇談をしつつ、続いてのフライブルク市主催の意見交換会では、ホーン市長、キリヒバツハ副市長、今まで長きに渡り両市交流の実務を担っていたブルガー国際交流部長の後任のアニケ・ヴィーデマンさんと信頼関係の醸成につとめた。特に、40歳のホーン市長の話しの中で印象に残ったことは、フライブルクは人口が増えており、まちの一番の重点施策は、子育て支援策、特に環境に優しい安価な住宅を供給すること、ご自身も3人の子育て中で、育児休暇を取得したり、抱っこバンドで乳幼児を抱えて役所で執務をすることもある等、ユーモアを交えて話しをする姿に気さくで親近感を覚えた。

フライブルク市滞在の2日目は、早朝から黒い森で知られるシュヴァルツヴァルト地方で餌になる牧草から完全有機での農法による酪農家を訪問、午後は、2020年に新しくオープンしたサッカー日本代表堂安律選手も所属するSCフライブルクのサッカーパークを視察し、続いてFTスポーツ幼稚園と小学校を訪問した。それぞれ政策分野は異なるが、環境と人に優しいというコンセプトは共有されていた。そして、フライブルク市最後の夜は、ハーグ副市長や教育関係者と意見交換し、更なる交流の深化に努めた。この4月にはホーン市長が市議会議員とともに本市を訪れるとのことで、松山での再会を約束し、フライブルク市を後に、視察日程後半の訪問地フランスエクス・レ・バン市へと陸路バスで向かった。

坂の上の雲の足跡を尋ねて！140年の時を経てエクス・レ・バン市へ

道中、深い霧につつまれ、みぞれまじりの冷たい雨が降り続く中、昼頃にはスイスのジュネーブに到着した。永世中立国スイスは200を越える国際機関を有し、人口のほぼ半分が外国人、国籍も最低198ヶ国、(国際連合の欧州本部があり、198ヶ国が加盟しているゆえ)車窓から国際連合欧州本部、国際労働機関や世界保健機構、赤十字社本部を視察した。休憩後、午後2時過ぎに再び出発、いよいよ最終地のエクス・レ・バンへ、高速道路を1時間ばかり走り、午後4時前にホテルに到着し、外務省在リヨン領事事務所の都築さん、西川さんの出迎えを受けた。フライブルクから500キロ約7時間のバス旅の疲れを少し癒やした後、午後6時からエクス・レ・バン市のルノー・ベレッティ市長主催の歓迎レセプションにのぞみ、松山市として初めての公式訪問が実現した。



フランス国旗と日本国旗が掲揚された
エクス・レ・バン市庁舎

市庁舎及び前庭には、日本の国旗がフランス国旗と並んで掲揚され、その光景に一同、大いに感動、整列し一礼にて感謝を表した。役所内の広間には、ベレッティ市長ご夫妻と5



ベレッティ市長へ記念品を贈呈

歳の可愛い息子さん、副市長(副市長は男女5名ずつ)、市議会議員、商工会や武道協会の役員の方等、総勢70名程度に出迎えていただいた。冒頭、ベレッティ市長から、ご自身、親日家で剣道の有段者でもあり、温泉や秋山好古さん(フランス留学中の1887年、当地を訪問)といった共通点があり松山市との交流に強い意欲を示され、今年5月に同市で開催予定の日本祭りへの参加案内を含め、熱烈な歓迎の挨拶をいただいた。それを受けて、私から、日本国旗掲揚や大歓迎への謝意、松山市の簡単な紹介、まずはお互いを知ることからはじめ、一つひとつ交流を積み上げていくことが必要であると応じた。その後、今回の橋渡し役としてご尽力いただいたリヨン領事事務所の尾形修所長から、「両市は秋山好古さん以来、実

に140年以上さかのぼる友情で結ばれていた。今回の松山市議会の訪問を機会として深められる交流は、まさに日仏友好の素晴らしい一例となるであろう、我々も最大限の橋渡しの支援をしていきたい」との挨拶をいただいた。その後、地元産のワインや領事事務所のご配慮で愛媛県や松山産の地酒もふるまわれ、身振り手振りの会話でコミュニケーションをはかり、記念写真をとる姿があちらこちらで見られた。レセプション終了後は、近くの市営のカジノや日本祭りの会場となる歴史を感じつつ手入れの行き届いた施設を視察し、更に市長主催の意見交換会では、ベレッティ市長の若き日の日本での剣道修行の様子をご披露いただいたり、本市議員団のメンバーのひとり



趣ある中心地の街並み

りが友好の証として持参したみきゃんの被り物を市長ご本人が被って記念写真に応じていただく等、夜が更けるまで、長時間のバス移動の疲れを忘れさせるほど和気あいあいとした雰囲気の中、充実したエクス・レ・バン市訪問の初日を終えた。

2日目は、朝からあいにくの雨だった。午前中は、ドメヌ・ド・マリオズとシュバレの2つの民間の温泉施設を視察した。温泉は両市の共通項と認識していたが、活用方法は全く異なった。本市では、主に飲食や娯楽を伴い、癒しやストレス解消を目的とする観光という色彩が強いのに対し、エクス・レ・バン市(おそらくフランス)では、医療や療養という湯治が主な目的であり、3週間程度の長期滞在が必要とのことだった。しかし、異なるがゆえに新たなファン層を開拓する可能性も感じた。

その後、1998年日本がサッカーワールド・カップ(フランス大会)に初めて出場した際にエクス・レ・バン市がキャンプ地となったことを記念して作られた市内中心部にある赤い鳥居が印象的な日本庭園を散策し、その後、フランス最大の自然湖ブルジェ湖畔に移動した。昼からは雨も上がり雲の切れ間から陽がさすまざるの天候となる。豊富な水量と高い透明度を誇り、中世からの風情を感じさせる洋風建築が点在する湖畔を見学、ベレッティ市長も公務の合間をぬっていらしていただき、プライベートな話題からゴルフの松山英樹選手の話、トランプ政権樹立後の世界情勢やフランスの揺れる国内政治情勢の話等、会話は大いに盛りあがった。



赤い鳥居が印象的な日本庭園にて

豊富な水量と高い透明度を誇り、中世からの風情を感じさせる洋風建築が点在する湖畔を見学、ベレッティ市長も公務の合間をぬっていらしていただき、プライベートな話題からゴルフの松山英樹選手の話、トランプ政権樹立後の世界情勢やフランスの揺れる国内政治情勢の話等、会話は大いに盛りあがった。



ブルジェ湖畔にたたずむオートコンブ修道院

ここでベレッティ市長にお礼と今後の交流と再会を期して別れを告げ、最後の視察場所のサヴォワ地域（エクス・レ・バン市がある広域行政区域）の王室の霊廟となっているオートコンブ修道院へ歩を進めた。同所は、本来ならこの時期はメンテナンスのため、クローズしているそうだが、エクス・レ・バン市側の特別の配慮で入館を許可いただいた。ガイドにより敷地内を案内いただく。築1100年の歴史と素晴らしい装飾の数々は圧巻。敷地内のスペースを会議室としてお借りし、視察テーマの交通と不登校について、それぞれの担当に分かれてフランス及びエクス・レ・バン市の現状や課題について質疑応答や意見交換を行った。予定時間では物足りなさを感じつつも全視察行程を終え、昨年末にて退官されたものの、今回の視察に際してエクス・レ・バン市の窓口として行程策定から最後までお付き合いいただいたオリヴィエ・ベルリユー官房長他エクス・レ・バン市関係者や尾形所長他領事事務所の方に別れを告げ、午後6時過ぎにホテルに帰着した。最後の夜は視察団メンバーの総括を兼ねた意見交換会となり、各位が今回の視察総括を述べ、私は恥ずかしながら無事終わった安堵感からか感極まり言葉に詰まるひと幕もあったが、明日の早朝の帰国出発を考慮して早めにお開きとした。

世界平和に海外都市間の草の根交流の重要度の高まりを認識

翌朝、午前7時にホテルを立ち、スイスジュネーブ空港へ予定より早めに到着した。しかし、ヘルシンキ空港行きの航空便が急きょ乗務員のストライキにより欠航となった。欧州では、航空便の欠航や空港内の不審物（ほとんどは忘れ物）で空港が閉鎖になることが時々あるとのこと、添乗員の機転により、オランダアムステルダム空港経由成田空港行きの代替便が手配できた。しかし、アムステルダム空港では乗り継ぎ時間がわずか50分、出国審査もパスしなければならず、しかも乗り継ぎカウンター間が2キロくらい離れており、空港内運動会の様相、多汗と冷や汗をかきながら搭乗締め切り時間のわずか3分前、全員が日本行きの航空機に飛び乗ることができ、ひと安堵した。日本時間の25日午前11時45分に成田空港に到着、入国審査、約6時間の待ち合いを経て、定刻より遅れ午後6時30分成田を出発し同8時30分松山空港に到着した。同所で解散式を行い、自宅迄の帰途の安全配慮をお互い確認し散会、復路行程17時間、全ての行程を終了した。

期間中、航空便の欠航により一部行程を変更せざるを得ない状況が発生したが、公式

行事や視察研修は全て予定通り実施することができ、想定以上に中身の濃い有意義なものとなった。特に今回、1、2期の若手議員も多く参加いただき、今後の議員活動や市政への政策提言に貴重な経験や見識を得られたのではないかと思います。とりわけ在リヨン領事事務所の尾形所長の「外交は国政マターとされているが、国際的に安全保障等様々な国家間の課題が出てきている昨今、市民間の草の根交流の必要性がより高まっており、こうした意味からより市民に身近な自治体間交流は重要になってきている」との言葉は地方議会といえども、グローバル化が進む中で議員外交も議会活動の重要な政策課題となりえることを確信した。

結びに、フライブルク市のマーティン・ホーン市長並びにエクス・レ・バン市のルノー・ベレット市長をはじめ行政、各視察先、企画立案や通訳等円滑な実施にご協力をいただいた沢山の方、フジトラベルサービス様のご支援ご協力に深く感謝を申し上げ、昨年6月の団結成から10ヶ月にわたった団長の任を解かせていただく。

ダンケシェーン(Danke schön)

メルシーボクー(Merci beaucoup)

ありがとうございました。



エクス・レ・バン市副市長(左から二人目と七人目)と
リヨン領事事務所長(左から五人目)らと交流を重ねる

5 政策提言

1. 市長提言

【1】交通施策

- (1) 公共交通の社会的位置づけと公費負担を明確にするため、条例等の策定をすること。
- (2) 公共交通機関の利便性(低運賃、便数増、乗り継ぎのシームレス化等)の向上に努めること。
- (3) 自転車政策は促進(自転車道や駐輪場の整備、シェアサイクルの導入、啓発)と規制(放置自転車や違法対策、マナー向上)の整合性を取りながら推進すること。

【2】女性活躍

- (1) 個性や能力を磨き、結婚・出産・育児や家庭と仕事の両立をサポートし、キャリアに応じたポジションを確保できる包括的な女性活躍の政策パッケージを作成すること。

【3】温泉と観光

- (1) エクス・レ・バン市の医療ツーリズムとアドベンチャーツーリズムを融合した観光施策は、道後にはない長期滞在者や富裕層、インバウンド含め新たな顧客層を掘り起こす可能性が期待できるため、関係者と連携しながら調査研究を進めていくこと。

【4】教育(不登校対策)

- (1) 学校現場の負担を減らし、予防や早期対応も含めて、医療・福祉分野との連携を強化すること。

【5】海外都市交流

- (1) 本年4月上旬予定のフライブルク市ホーン市長他代表団に対して、松山ならではの心に残る受け入れ環境を準備すること。
- (2) エクス・レ・バン市と、新たな姉妹都市交流にむけての可能性を検討すること。
 - ① 本年5月、同市で開催予定の第3回日本祭りへの参加について検討すること。
 - ② 坂の上の雲のまちづくりの国際交流のコンテンツとして、久松定謨公や秋山好古のフランス留学が近代日本や道後等本市の発展に寄与した史実を明らかにし発信すること。
 - ③ 温泉交流は、温泉関係者にも情報共有し、まずはリモートでの交流を進めていくこと。
 - ④ 剣道交流は、一部民間での交流がスタートしており、さらに発展するよう所要の支援を行うこと。

【6】食と農

- (1) 学校給食の地産地消を拡充すること。並びにオーガニック化の調査・研究を進め環境と人間に優しい農業政策を展開すること。

【7】スポーツ

- (1) 地元プロスポーツチームを核とした総合型地域スポーツクラブの構築にむけて検討すること。

【8】その他

- (1) 環境モデル都市としての市民と共有できる具体的目標を掲げること
フライブルク市は、2035年カーボンニュートラル実現という野心的目標を大きなプラットフォームとして市民と共有し、各種施策を実践しており、施策の推進力となる市民にわかりやすく共有できる目標を掲げること。
- (2) 産官学連携による専門組織を育成すること
フライブルク市では産官学連携による非営利法人組織フライブルクイノベーションアカデミーが、それぞれのテーマに応じ専門家を配し顧客のニーズに効率的かつ効果的に調査研究活動をサポートしており、MICE(マイス)振興にも期待を持てるこうした組織を育成すること。

2. 議会改革

- (1) 議会活動における議員外交事項の扱いについて
世界平和への危うさが懸念され、デジタル化・SDGs・多様性等国際的な取組みが重視される中、外交は国政の専権事項にとどまらず地方行政レベルでの草の根交流の重要性を感じた。そこで、議会外交(議員レベルの交流)も本市議会活動の一環として具体的施策や交流のあり方を議論すること。
- (2) 海外都市派遣の実施要領の見直しについて
視察内容や昨今の物価高騰、社会経済状況等を勘案し、海外都市派遣の実施要領の見直しを協議すること。